

時には同じ大きさのお芋を手にするとはできない。どの子どもも、大きさや形を比べ、自家製の天秤量りで重さ比べをすれば、みんなで同じぐらいつつ分配することに同意してくれるだろう。幼稚園で子どもたちとお芋を味わうこともあるが、家庭の食卓にまで楽しさが届く日を楽しみに思う。

大人が花のある生活環境を楽しみに準備することは、昔から子どもたちにとって一つの精神的な風土になっているような気がする。子どもたちはいま土のベッドから起き上がるうとしているのかも知れないし、眠っている

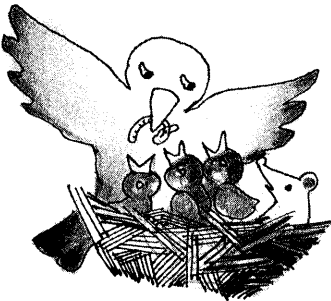
のかも知れない。やがて花に限らず植物との付き合いを続けて行くと植物のライフサイクルに気がつき、再生の季節が訪れた時にどの生き物も同じものではないことに気づく日がある。そんな時には小さい頃の植物との思い出が知らず知らず自分自身を掘り起こしていることだろうと思う。将来掘り起こすべき時代を子どもは今いきている。子どもが手続きを知らずに花をちぎることがあっても、叱ったり嘆いたりしない余裕をもって幼稚園の植物を丹精して行きたいと思う。

(川崎若葉幼稚園)

五月の子どもたち——その2

その時に

中谷喜久子



ことしのぼたんはよいぼたん

おみみをからげてすっとなん

もう一つからげてすつとんとん。

いれて

だーめ。

お山につれていくから

山には山ぼうずがいるからいや。

海につれていくから

海には海ぼうずがいるからいや。

川につれていくから

川には川ぼうずがいるからいや。

それでは〇〇につれていくから

いいよ。

中略

だれかさんのうしろにへびがいる

わたし？

いいえ

わたし？

そう。

うさぎ組（年長）へ二十名を送り、新たに十六名を迎

えて三・四歳児混合ことり組二十五名の複数担任の一人となった私はとても張り切っていました。ホールでは毎日大型箱積木が迷路と称して広げられていて、その横の空いた所では進級した子ども達が核となって「あぶく たった」や「ことしのぼたん」「おおかみさん今なんじ」をして遊んでおり、私も新入園の子ども達をささいながら一緒に遊んでいました。

五月の連休が終わったある日の事です。いつものようにホールでひと遊びした子ども達が園庭に出て行ったのでホールには誰もいなくなり、私も後から庭に行きました。日の光が暖かく、みんな思い思いの場所で遊んでいる様子に「新入園の子ども達も園生活に慣れてきて、お友だちと過ごせるようになった」と思いました。

その時「せんせいここにきてー」と呼ばれたので、右にも左にも子ども達で満員になっているシーソーの片方に割り込んで腰を下ろしました。上がったたり下がったり、左右のバランスをくずすのに大騒ぎになり、その賑やか

な面白そうな雰囲気やさそわれて次々にお友達が「いれてー」とやって来ました。膝にのったり背中にしがみついたり、それでも乗る場所がなくて「だめ」の声に、すかさず「海につれていくから」と応じ、「海にはうみぼうずがいるからいや」と掛け合いになり、自然に「ことしのぼたん」の形式でシーソー遊びが続いて行きました。私はもちろん「だ・め・よ」の側で楽しんでいました。

そこへ進級してうさぎ組になったN子が「いれて」と駆け寄って来ました。待ってましたとばかりに私達は大きな声で「だーめ」と言ったものです。急に彼女の表情が堅くなり顔色が変わりました。同じ組の女の子達が「N子ちゃん『山につれていくから』って言って」「『デパートにつれていくから』って言ったら」「好きなことを言えばいいよ」と口々に助け舟を出したのですが泣き出してしまいました。「N子さん、今ね、『ことしのぼたん』のことばで遊んでいたのよ。だから初めは『だめ』って言ったの」と私の説明も全く耳に入りませんでした。「N子ちゃん『だめ』って言うおあそびでしょ

う、」なくのはおかしいよ」。泣きじゃくりの止まらな
い彼女にしびれを切らしたように他の子たちは「一ぬー
けた」「二ぬけた」と離れて行きました。「『だめ』っ
て言われて悲しくなったのね。ごめんさいね。でもお
あそびのことばだから本当ではないのよ、わかってくだ
さいね。」私もN子の肩を抱いて話しましたがわだかま
りは解けない様子でした。シーソーの後方にあるジャン
グルジムで遊んでおられたN子の担任T先生に事情を話
して「さあ涙をふいて元氣を出してね」と声をかけ、そ
れぞれうさぎ組ことり組の保育室に戻ったのでした。

保育後にT先生からN子について話がありました。昼
食が終わってから「今日遊んだ事で何をしたか、どんな
事が楽しかったか」を糸口にシーソー遊びの様子をクラ
スのみんなに伝えてもらった。それがきっかけでわらべ
うたあそびの「ことしのぼたん」をして遊んだこと、N子
も参加していたとのこと、「N子さんはお庭での事を納
得したようでしたよ」との報告を聞きました。その時私は
これで一件落着と安心し、同時に保育者間で共通理解の

あることは本当に大切な事だと思い、T先生の適切な事後の対処に感謝したのでした。ところが数か月後に痛恨の思いでこの日の出来事を顧みることになりました。

私達の幼稚園では夏休み中に家庭訪問をする事になっており毎年八月中旬に行います。N子の家庭訪問の時にT先生は母親から意外な事を聞きました。「五月頃に大泣きして帰って来たことがあった。中谷先生から『だめ』と言われた。N子の大好きな先生から何か断わられたのがショックらしくしばらく泣きやまなかった。母親としても『なぜ』と釈然としない。父親は『幼稚園に行行って聞いて来なさい』と言うのですが、一体どうした事だったのでしょうか。……」T先生はその時の一部始終をお話し、「まアそんな事でしたか」とN子の母親は笑ってしまわれたとの事でした。

T先生から家庭訪問の様子をお聞きして、私は一学期中のN子の堅い表情を思いうかべながら、その時に収めることが出来なかった彼女の気持ちが少し理解できたよ

うな気がしました。同時にその気持ち、泣くことでしか表現できなかったN子の心の痛みを理解できずにいた、私の保育者としての心のおごりを恥じたのでした。

ことり組（四歳児）のN子さん——入園式後一週間ほどたってからしばらくの間、登園時に玄関まで送って来られた母親と離れる時に泣いた・よく家庭訪問をした・A子やT子と親しくなり、その頃から幼稚園に早く登園するようになった・お家で白うさぎを飼っているのをお散歩の途中にみんなで見せて頂いた・口数が少ないと思っていたら家では幼稚園での事をよく話すとのことで見直した・縄とびが得意。——年長組（うさぎ組）になった彼女は、その時にシーソーで遊んでいるとその仲間に入りたいというよりも前の担任だった私のところへ駆け寄ったのでしょうか。「だめ」は遊びの中の友だちみんなの声ではなく、目の前の（中谷）先生から正に「来てはだめ」と拒否されたと感じたのでしょうか。——その時に、泣き出した彼女に私は自分中心の解釈で接したの

でした。

あなたは遊びのことばを早合点して誤解したのよ・他のお友だちも言っているようにこんな事で泣くなんて・驚かしてごめんね、って謝っているのに、引込みがつかなくなったのかしら・これだけ説明したのだから、こちら（シーソーに乗っていた人たち）の気持ちもわかってね。——その時に、新学期で張り切っていた私は新入園の子ども達や新しく受け持った子ども達の方にばかり心を向けていて、ことり組から年長児クラスのうさぎ組に進級したN子の、うれしような不安なような、不安定な心のありように気づかなかったのでした。シーソーのそばで他の友だちと一緒にわけてわけて顔になだめずかしている先生（私）の気持ちを彼女は敏感に察して、なお更に悲しくて泣き続けたのでしょうか。「ごめんないねN子さん、あなたの気持ちが変わらなかったの。」

N子は氷が溶けるような感で担任のT先生にも、又、私へも信頼を寄せるようになりました。

この小さな出来事は、鮮明に記憶に刻まれて、以後の

私の保育者としてのありように大きく場所を占める事になりました。「子どもの心を知ることへの畏れと、共感することへの謙虚な思いが無ければ、それは理解したつもりの保育者の心のおごりになるのではないかと。」

五月の暖かい日差しを浴びると、N子の駆け寄って来た時の笑顔がまぶしく思い出されます。「ことしのぼたんはよいぼたん」と歌声が聞こえてくると、N子の一瞬とまどった表情と堅く閉ざして泣いている姿が痛みとなって私の心を引き締めます。

N子は四人兄妹、上から二番目の長女です。当園卒業生の長男J君は高校一年生になり、N子さんは中学一年生、次女のA子さんは小学三年生、そして四番目の三女のY子さんはこの春にことり組の私のクラスから、うさぎ組に進級いたしました。

（八戸市小中野幼稚園）